創作神楽 厳島

平成22年 9月5日(日) 開演 14：00

ALSOKホール（県立文化芸術ホール）

主催　広島県，財団法人自治総合センター，ひろしま夏の芸術祭実行委員会（広島県，公益財団法人ひろしま文化振興財団，エリザベト音楽大学，広島県吹奏楽連盟，社団法人広島県観光連盟），広島市，竹原市，三原市，尾道市，福山市，府中市，三次市，庄原市，大竹市，東広島市，廿日市市，安芸高田市，江田島市，熊野町，北広島町，大崎上島町，世羅町，神石高原町，財団法人蘭島文化振興財団，耕三寺博物館，財団法人しぶや美術館，中国新聞社

後援　朝日新聞広島総局，産経新聞中・四国総局，山陽新聞社，日本経済新聞社広島支局，毎日新聞広島支局，読売新聞大阪本社，ＮＨＫ広島放送局，中国放送，テレビ新広島，広島テレビ，広島ホームテレビ，ＦＭちゅーピー76.6ＭＨｚ，ＦＭはつかいち76.1ＭＨｚ，エフエムふくやま，広島エフエム放送，広島リビング新聞社，東広島リビング新聞社，福山リビング新聞社，尾道ケーブルテレビ，KAMONケーブルテレビ，ふれあいチャンネル，三原テレビ放送，三次ケーブルビジョン

協賛　イズミ，ウッドワン，オタフクソース，賀茂鶴酒造，コカ・コーラウエスト，瀬戸内海汽船，そごう，天満屋，電通西日本，にしき堂，広島ガス，広島銀行，広島県医師会，広島県歯科医師会，広島県信用組合，広島県薬剤師会，広島市信用組合，広島信用金庫，広島綜合警備保障，広島電鉄，福屋，マツダ，もみじ銀行，ヤマハミュージック中四国（50音順）

ひろしま 夏の芸術祭

Mécénat
[社]企業メセナ協議会認定

宝くじは豊かさ築くチカラ持ち。
宝くじは、広く社会に役立てられています。

プログラム

伝統を受け継ぐ
「安 達 ヶ 原」　　川北神楽団 (山県郡安芸太田町)

深化する神楽
「大　江　山」　　原田神楽団 (安芸高田市)

休　　憩

新たなる挑戦
創作神楽「厳島」　　琴庄神楽団 (山県郡北広島町)

ごあいさつ

広島県知事 湯﨑 英彦

「ひろしま夏の芸術祭」は、「出会う。生まれる。響きあう。」をテーマに、県民の皆様に気軽にクラシック音楽や美術、伝統芸能などに触れていただき、芸術・文化と出会う喜びやすばらしさを直接体感していただくため、７月３日から開催してまいりました。そして本日、芸術祭のフィナーレを飾る神楽公演を開催いたします。

神楽は、五穀豊穣の祈願や神々への奉納、または祖先の鎮魂の舞として、全国各地に保存・伝承されている伝統文化であり、郷土への誇りと愛着を深め、活力に満ちた地域社会の形成に大きな役割を果たしております。

これに加え、本県の神楽には、伝統を尊重しつつも、時代の流れに適応し新たな創作を加えることにより、舞台芸術として独自の発展を遂げてきた歴史もあり、この多様性が多くの神楽ファンから支持されているところです。

本日の公演では、伝統的な演目「安達ヶ原」、「大江山」に続いて、本県が誇る世界文化遺産「厳島神社」と平清盛を題材に、新たに書き下ろした創作神楽「厳島」をご鑑賞いただきます。

この新作「厳島」が、今後、多くの神楽団に舞われ、皆様に愛され親しまれる演目へと育てていただくことを期待しております。

御来場の皆様には本日の公演を心ゆくまで御堪能いただきたいと存じます。

終わりに、本公演の開催に当たり、多大な御支援と御協力を賜りました関係各位に対し、心から感謝申し上げましてごあいさつといたします。

伝統を受け継ぐ

「安達ヶ原」 川北神楽団 (山県郡安芸太田町)

あらすじと解説

平安時代の中頃、鳥羽上皇が玉藻前(たまものまえ)という美女を寵愛されるようになると、体調を崩され世が乱れ始めます。

これを不審に思った陰陽師・安倍泰親(あべのやすちか)が玉藻前を占うと、玉藻前は唐の国で悪行を重ねた末、わが国へ逃亡した金毛九尾(きんもうきゅうび)の悪狐だったのです。この悪狐は、正体を見破られると京の都から安達ヶ原へ飛び去り、再び美女に化けて旅人を襲うようになります。

那智(なち)の大法師・東光坊阿闍梨祐慶(とうこうぼうあじゃりゆうけい)は剛力を従え修行の途中、陸奥国安達ヶ原(むつのくにあだちがはら)にさしかかったところで日は暮れてしまい、出会った美女に一夜の宿を借りようとしますが、美女は悪狐となり襲いかかり、剛力は食い殺され、法師は辛うじて逃げ去ります。そして、弓の名人三浦ノ介・上総ノ介(みうらのすけ・かずさのすけ)が悪狐退治に向かい退治する物語です。

《出　演》

法　　印……月長孝治
剛　　力……大倉幸人
小　　力……藤田拓海
姫　　……郷田　亮

大悪狐……藤田賢司
小　　狐……河野智恵子
三浦乃介……国本福太郎
上総乃介……佐々木一紀
紫の戸(幕内)……佐々木浩司

大太鼓……郷田忠孝
小太鼓……河野智幸
手打鉦……河野洋一郎
笛　　……佐々木郁江

神楽団プロフィール

川北神楽団は、明治26年に9名で矢上系石見神楽を受け継ぎ、昭和初期には浜田八調子の大江山などを取り入れ、当時としては画期的な神楽団だったようです。

平成５年に結成100周年を迎え、これを機に神祇舞いを加え、10年１月には『四神』が無形民俗文化財の指定を受けました。

今後、後継者の育成と共に川北の神楽の保存伝承に力を注ぎたいと思います。

深化する神楽

「大 江 山」 原田神楽団 (安芸高田市)

あらすじと解説

平安時代『都の果て 一条・戻り橋に鬼が出た』『朽ち果てた都の玄関・羅生門に鬼が棲む』と言われ、妖術を使う鬼たちは、京の都へ舞い降りて悪事を重ねていました。

そこで朝廷は、鬼の根城を陰陽師・安倍清明に占わせると、清明は「丹波国・大江山」と告げます。そして、都の守(まもり)・源頼光(みなもとのらいこう)と四天王は、勅命を受け、大江山の鬼退治に向かいます。険しい山を登りはじめると、日頃信心する神様が現れ、人が飲むと力が湧き鬼が飲むと毒になる『神便鬼毒(じんべんきどく)』の酒を頂きます。更に登ると洗い物をする都から誘われた姫に出会います。

この姫に鬼の岩屋へ案内させます。鬼の頭(かしら)酒呑童子は、頼光の一行が山伏姿であることから山伏問答を仕掛けてきますが、その終わりには山伏と認め、頼光の一行が持参したお神酒を「都の酒」と喜んで飲み、酔い伏してしまいます。

そこで、頼光主従は鬼たちに挑み、壮絶な戦いの末成敗します。

《出　演》

源 頼 光……河 野 英 利	酒呑童子……水 重　剛	大 太 鼓……清 水 成 美
卜部六郎季武……升 田　洋	茨木童子……市 尻 篤 識	小 太 鼓……水 木 敏 博
坂田金時……垣 内 和 久	唐熊童子……河 野 伸 良	手 打 鉦……松 岡 健 一
紅 葉 姫……上 野　将		笛　……原 田 健 次

神楽団プロフィール

原田神楽団は、安芸高田市高宮町の原田八幡神社を守護神として祭礼にいそしんでおり、上演可能な演目は17以上を保持しております。「後継者育成」「地域文化の伝承」をテーマとし活動しています。地域の方々の御協力により子ども神楽も発足し、次の時代を担ってくれる若い世代を育てながらさらなる発展を目的に団員一同頑張っています。今後とも温かいご支援ご指導をよろしくお願いいたします。

新たなる挑戦

創作神楽「厳島」 琴庄神楽団 (山県郡北広島町)

リハーサル風景

解説

この神楽は、神話と伝説、史実を組み合わせた厳島神社縁起を基とする物語です。

須佐之男命を親神とする市杵島姫(いちきしまひめ)ら三人の女神は、国家鎮護の支えたらんと、筑前宗像(ちくぜんむなかた)より東へと向かい、瀬戸内へ入りました。やがて、女神達の目の前に気高い山を頂く、美しい島が現れ、その荘厳なる景色に心奪われた女神は、この地に鎮まります。

市杵島姫は「神霊を斎(いつき)祭る島」の意味を持っていることから、この島は、「イツキマツル」・・・「厳島（イツクシマ）」と呼ばれるようになります。

その五百年の後、平安時代の末の事、安芸守となった平清盛は、一族を引き連れ、厳島へと参詣し、その霊験あらたかなる神の島を敬い、一族の守り神とします。

その御神徳を我が物とした清盛は、平家の棟梁から、太政大臣という天下人の極みへと登り詰め、「平家にあらずんば、人にあらず。」と言わしめた平家一門の全盛期を迎えていきます。『清く盛えよ清盛』とその名前に祈りを込められ、その天賦の才によって、この世のすべてを掌中に収めた清盛は、瀬戸内海の大自然をもその庭先とした壮大なる現在の厳島社殿の基礎を建立しました。

栄えるを極めれば、栄えるに任せて蹴落とし、葬り去ってきた僧侶、公家、源氏等の政敵達が清盛を黄泉(よみ)の旅路の供とせんと、冥府(めいふ)の闇より襲い掛かってきます。陰陽師「安倍泰親(あべのやすちか)」と清盛の四男「知盛」の助勢を得て、これを退けますが、清盛は、その因果の呪い故か、熱病に倒れます。

四年後、平家一門は、壇ノ浦の水泡へと消え、清盛の妻・二位尼時子は、「波の下にも都は、候ぞ。」と幼き孫・安徳天皇を抱き、波の下に都を求め、一族の幕を下ろします。

その数年後、時子の遺骸が厳島へと流れ着いたといわれます。
朱の鳥居の袂に待つ清盛の魂に引き寄せられるように・・・

二位殿灯籠
二位の尼時子の遺骸が流れ着いたことを記す石碑・有の浦

時代の寵児となり、その夢に向かって走り続けた清盛。
彼の祈り空しくその幕を引いた平家一門。
時代に敗れた彼らを英雄と語る事は、無かったでしょう。

しかし、千年もの昔、海外貿易を以って、国が栄えることを図り、大海原に海の道を見出し、瀬戸の海を拓くと言う大事業を成し遂げ、今日、「世界遺産」と称えられる厳島を残した清盛こそ、わが郷土広島にとって史上最大の英雄のひとりである事に違いありません。

出　演

平清盛……若狭義文
二位の尼……菊本靖彦
（平時子）

市杵島姫……野上正宏
俊寛僧都（怨霊）（二役）

田心姫命……東　成憲
左馬頭義朝（怨霊）（二役）

湍津姫命……大田　学
藤原信頼（怨霊）（二役）

佐伯鞍職……桑本芳雄
安倍泰親……栗栖和昭
平　知盛……山根　陵

大太鼓……大田　守
小太鼓……山本智之
手打鉦……斉藤誠治
笛　……崎内佑結

神楽団プロフィール

琴庄神楽団は、北広島町(旧豊平町)の中心に位置する庄原八幡神社と琴谷天日神社を守護神とし崇拝してきておりますが、昭和48年神楽同好会が発足し、町内の神楽団より、八調子、六調子の神楽を習い奉納してきました。その後、高宮町の神楽団から神楽を習い昭和60年に琴庄神楽団となりました。歴史の浅い神楽団ではありますが、おかげ様で、現在では各地からお声をかけていただき奉納をさせていただいております。今後とも、温かいご支援の程よろしくお願い申し上げます。

企画・構成 石井誠治　台本・脚本 石丸 賢太郎　演出 崎内 俊宏(琴庄神楽団)

企画・構成
NPO広島神楽芸術研究所理事
石井誠治

昭和24年千代田町(現 北広島町)壬生に生まれる。1971年広島経済大学経済学部卒業。千代田町(現 北広島町)勤務・社会教育主事。1991年株式会社 ゼロワン設立。1993年郷土芸能「神楽」を舞台芸術へ「スーパー神楽中川戸」広島市アステールプラザ公演の企画・演出を手がける。1999年RCC早春神楽共演大会 企画・演出。
2003年ロシア・サンクトペテルブルク市建都300年祭 神楽公演演出・茨城県牛久市「広島神楽の公演」構成・演出。2004年NPO広島神楽芸術研究所設立発起人、設立当初より理事を務める。2006年マイクロソフトNPO支援プログラムにより広島・島根の神楽団体活動調査を実施。神楽ポータルサイト「神楽の杜(もり)」運用開始。広島・島根交流神楽「月一の舞い」を開催。企画・構成担当。

台本・脚本
石丸 賢太郎

昭和55年11月11日 高田郡(現 安芸高田市)吉田町に生まれる。比治山大学現代文化学部言語文化学科日本語文化専攻 卒業。卒業論文「中国山地における神楽の諸形態について」
現在、既存台本の編集・校訂を行い、創作神楽の台本も執筆している。
提供台本
・大塚神楽団「頼政」
・有田神楽団「有田・中井手の戦い」
・宮乃木神楽団「新羅三郎〜後三年の役」
・八千代神楽団「天慶の乱」
・下五原神楽団「将門記 滝夜叉」など。

演　出
琴庄神楽団 団長
崎内 俊宏

昭和30年11月29日 豊平町(現 北広島町)に生まれる。
昭和48年　琴庄神楽同好会が発足
昭和51年　琴庄神楽同好会入会
昭和58年　原田神楽団(安芸高田市高宮町)から指導を受ける。
昭和60年　琴庄神楽団に改名
平成21年1月1日 団長に就任

地域の方々のご支援により、神楽団のなかった琴庄地区に生まれた神楽団。発足時の初心を忘れずに、いつまでも挑戦者の意欲をもって末永く活動を続け、琴庄神楽団らしい歴史を築きたいと思っています。

神 楽 面：管沢面工房　管沢良典
神楽衣裳：かぐらや　管沢秀巳
神楽採物：神楽工房こだま　児玉敏之
神楽かつら：天空工房　山本知見

創作神楽「厳島」台詞台本

時子　波の下にも・・・波の下にも都は、候ぞ。

上段に二位の尼（平時子）。

時子　ワラワは、平清盛相国が北の方、時子と申し、朝堂にて二位の御位を賜りては、二位の尼御前とは呼ばれし者の成れの果て。夫 清盛相国には、これなる日ノ本が栄えるを単に念じ、ただただ、国の御為と勤めて候が、志半ばに彼岸へと旅立ち、後に残されし一族をまとめ、その志を継がんと思いしが、無念なるかな、都を追われ、今一度、都に登らんと覚悟を決めたる大戦を仕掛けたるも、既に天の利は、我らには、微笑まず。赤間の関の波の下に都を求め、幼き御門を御連れ申して候が、ふと気がつけば、安芸国は、厳島。わが体、流れつきたと思えて候。さても、我ら見放し賜うたる御社なれば、口を突くは、恨み言。されど、我が骸、この地に流れ着くは、未だ女神の縁断たれずか、真に以って奇縁なるかな。
されば語りて明かそうか、朱の鳥居の縁よな。

二位の尼退場。上段閉じる。

胴取　天照大神、素戔嗚尊が御両神、誓約の折、十柄の剣を以って生ませ賜うは、三女神。安芸国は、一宮。厳島大神と斎われたり。

三女神、上段より現れる。

市杵島　そもそもこの所に進み出で来る者、如何なる者よと思し召さんとも我等三神、素戔嗚尊を父として、生まれし三女神が一人にして、自ら、市杵島姫命、また、同じく田心姫命、湍津姫命なり。
　大神が仰せによれば、汝三柱の神は、道の中に降り、天孫を助け奉り、天孫の為に祀られよ。との事にて候へば、これなる豊葦原中津国の西の端、筑前宗像に鎮まりては、宗像大社へと斎われたり。されど、この度、思い立ち、東の方へと舟漕ぎ出だし、波のたゆとうにまかせ、我ら新たに鎮まるべき地を求め、これまで罷り越して候。
如何に佐伯鞍職、鞍職には、何処にあらん、これに御出会い候へや。

三女神、上段で口上。

鞍職　畏まって候。

袖から鞍職登場。神官装束。

鞍職　ここに佐伯鞍職、かしこみ、申しあげ奉る。如何に三女神様に申して候。只今、勅許を蒙り立ち戻りて候へば、これよりは、社殿建立の地を定め給えやの。

市杵島　これは、いとご苦労にて候。あれに拝まれたる霊山を頂く島こそ、我ら鎮まる地と見定めて候。御身は、在所の方にて候へば、細々案内候へや。

鞍職　畏まって候。あれに拝まれたるは、恩賀島とも呼びつらん。されば、御遷宮の御所を定められるべく候。まずは、我が先達仕らん。

市杵島　されば、御願い申して候。

鞍職、先導して、三女神、それに続く。（順逆の舞。）

歌　きよきよと　瀬戸の内海　漕ぎ分けて　四方の七浦　何処尋ねん

鞍職　あれに見えしは、包ヶ浦とも申して候。

鞍職　あれに見えしは、鷹巣浦とも申して候。

市杵島　あら美しの御景色かな。

二姫神　あれに見えし白浜は？

鞍職　あれに見えしは、御笠の浜とも申して候。

三女神、顔を見合わせて頷く。

市杵島　あら、美しの御景色かな。されば、我ら三女神、これなる地に宮柱ふと知りたて鎮まらん。

鞍職　畏まって候。さればこれに御社を建立仕り、恩賀島をば、美しの島。永久に斎われたる事を願い、厳島とも呼びつらん。
　三女神様には、厳島大神と崇め奉り、自らは、神主となり、子孫累代、奉身仕らん。
　されば、この所に御鎮まり為され候。

三女神　畏まって候。

三女神、退場。鞍職、袖へはける。
花道より平清盛（従三位）登場。

清盛　そもそも大広前に進み出で来る者は、桓武の御門の末流にして安芸守平清盛と申す者。また、これに続くは、我が北の方にして、平時子、まった、我が四男新中納言知盛と申す者にて候。我、すぐる年、父忠盛よりの遺業を継ぎ、高野山大塔落慶法要の折、さる高僧、我を見すえ、「御身、安芸国は、厳島。厳島大神をば崇め奉り、社殿を寄進されるなれば、その加護を蒙り、位人臣を極める事、間違いあろうはずも無し。」と賜って候。我には、悲願あり。
　これなる大八洲日の本は、人の往来、都の賑わい豊かに栄えども、広き海原の中の小さき島国に他ならず。されど、大海原を隔てたる向こうには、高句麗、大陸宋国あり。彼の大国、賑わい人の往来限りを知らず、豊かに栄え果てるを知らずとの事にて候、これなる日の本をば、彼の大国に並ぶとも劣らぬ強国となさしめんと欲す。されば、これよりも御坊の言葉に従い、一族郎党引き連れて、安芸国は、厳島。参殿仕らばやと存知候。

時子　されば、寂々お急ぎ為され候。また、自ら一族共々に、御供仕るべく候。

清盛　心得申して候。

歌　心だに誠の道に　叶いなば　祈らじとても　神は護らん。

清盛　あれに拝まれたるは、安芸国は、厳島。厳島大神にては、ましますかな。我、桓武御門が末孫にして、安芸守平清盛。これに謹み奏上仕る。我が願い聞き届けたまえ、我が行く末加護し給えかし。厳島大神におかれては、皇祖天照大神が御言葉を賜りて、天孫を助け、代々の天孫に祀り受けられよとの事と伝え聞く。我も、今は、臣下の身なるとも元をたどれば、畏れ多くも桓武の御門の血筋、天孫の流れを汲む者なれば、何卒、我を加護し給え。御神徳を賜るなれば、社殿造営、経典、経文三十二巻寄進仕り、一族累代、信心仕るべく候。

市杵島　さん候。それに額づき拝みおる、そこもとは、天孫の系譜を継ぎたる平清盛、その一族郎党なるか。汝等が奉身神妙なり。これより後は、汝が行く末、見守り遣わさん。

清盛　これは、これは、有難し、勿体無し。
これに神々の御言葉を蒙りたれば、帆に風受ける帆掛船の如く、海の道中突き進まんとぞ思うなり。

時子　お急ぎなされ候

知盛　心得申して候

三人の順逆。

清盛　海の道切り開くも今一息。されど、辺りは、音戸の瀬戸の難所と思えたり。開墾普請も難じて候へば、はや日は、西の山へとも傾き候。如何に大神御照覧あれかし、扇の舞。今一度、日輪を呼び返してくれようぞ。

扇で扇ぐ所作の舞。
一通り舞って、退場。安倍泰親登場。

泰親　そもこれなる注連内に進み出で来る者は、鳥羽院に仕え奉る陰陽博士安倍晴明公より数え降れば、五代の孫、播磨守安倍泰親とは申す者にて候。この度、清盛相国におかれては、重き病の床に臥され、如何なる養生を重ねるともその効験無し。流石の相国殿とても心細く、弱り果てられ神仏に祈り縋られたれば、落ショウ賜い、入道されて候。されば、院におかれては、これに心砕かれ、如何なるモノの障りとも知れず、これを祓えよとの御言葉を賜って候へば、これよりは、清盛相国が屋敷、六波羅指してふみ急がばやと存知候。

歌　天の原　ふりさけみれば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも

泰親　急ぎ候程にはや、六波羅。相国殿が館とも思えて候。如何に相国殿、只今、播磨守泰親、これに参上仕り候。

上段開く、脇息にもたれかかる清盛。その側に寄り添う時子。

泰親　如何に相国殿には、御様子如何にてや候。

清盛　さればにて候。昼な、夕なと我を呼ぶ声すれど、姿は、見えず。この声我を苛み、眠りを奪われ、既に晦日を数え、この五体は、火中の石くれの如く、身を焦がすは、地獄の焔か。如何なる養生かさねるとも一向に快癒の兆し無し、これも偏に我が業の深さなるかな。ほとほと弱り果てるものにて候。如何に播磨守殿が御見立は、如何にて候ぞ。

泰親　されば、我が家累代秘伝の書。占事略決を紐解き、占い見ん。

注連縄を張り、定位置に戻る。

泰親　相国殿、時子殿には、これなる注連の内に座して、決して身じろぎなされる事なかるべく候。

時子　畏まって候。

泰親　それ森羅万象、太極を分かちて、両儀を開き、乾坤を分かつ。これ、陰陽双極なり。

清盛　・・・！！我を呼ぶ声、木霊する。我を呼ばわるは、何奴なるか。

清盛、御乱心。

時子　清盛殿。

俊寛　清盛。

清盛　それにあったか、俊寛僧都。

信頼　汝に打ち倒されし無念さや。我ら苛む、煉獄の焔。

清盛　中納言信頼かっ。

義朝　恨めしいぞや、妬ましいぞえ。

清盛　それにあったか、左馬頭義朝。

清盛　我を呼ぶは、汝等か。我を恨み、幽世より舞い戻りし、その心意気、天晴れと褒め遣わそう。

泰親　それ、四聖、八象神、十二方位の神なれば、陰陽道十二天将、我が求めに従い、現世にたゆとう、幽世の住人。
形無き者に形与え、声無き諸人の声を我に届けよ。

怨霊、三人姿が露見する。

泰親　如何に知盛殿、早々この所に御出会い為され候へや。

知盛　心得申して候。

知盛、飛び出してくる。

俊寛　汝を恨みて、冥府の果てよ。

信頼　六道輪廻の輪を外れ、今ぞ味わえ、地獄の業火。

義朝　つもりし恨み、晴らしてくれようぞ。

怨霊　いでや、共に奈落へ誘引せん。来れや、清盛。

立合い。

清盛　如何に汝等が望むは、我が命か、魂魄か。されど、我が五体砕け散らんとも、我が心は、滅ばず。
我が魂魄果てるとも、我が志は、消えず。

泰親　左青龍、右白虎、後玄武、前朱雀、中央大天土用黄龍。幽世の住人よ、汝等が住まうは、彼岸の彼方。あるべき者は、あるべき場所へ。住むべき者は、住むべき国へ。破邪顕聖急々如律令。

怨霊、怨念、袖にはけていく。
泰親と知盛、その後を追いかけて小走りに退場。

清盛　如何に厳島大神。御照覧あるか、汝等が加護以ってして、これに倒れるは、我が運命の輪の内というなれば、謹み受け入れよう。されど、たとえ、我、これに朽ち果てんとも、御身等が加護ありて、我が志いく千代久しく、永久に語り告がれるべし。

清盛、よたよたと上段に入ると倒れる。
そのまま上段閉まる。
再度、上段開く、二位の尼（時子）。前に出る。

時子　如何に我等一族の命運もこれに費えるか、さても、盛者必滅の理よな、この期に過るは、厳島。清盛殿と過したる夫婦互いに慈しみの日々に思いを巡らし、我が頬伝うは、飛沫か涙か・・・先に旅立たれし、清盛殿が御許へと馳せ参じん・・・波の・・・波の下にも都は、候ぞ。

再度、上段開いて、大鳥居の下に清盛。

時子　慈しみ　夫婦互いに思い馳せ　想い重ねる　朱の鳥居よ。

二位の尼、清盛の横に入り、互いを見つめあい幕が閉まる。